

関釜裁判ニュース

2011年7月10日発行

第59号

釜山「従軍慰安婦」
女子勤労挺身隊
公式謝罪等請求事件

戦後責任を問う
関釜裁判を支援する会

関釜裁判とは、一九九二年二月、韓国釜山市などの元日本軍「慰安婦」と元女子勤労挺身隊の十人が、山口地裁下関支部に、日本国の公式謝罪と賠償を求めて提起した裁判である。九八年四月、「慰安婦」原告の一部勝訴判決がでた。しかし、広島高裁で、二〇〇一年三月、「慰安婦」原告逆転敗訴、挺身隊原告の請求は全面棄却。二〇〇三年三月、最高裁で上告棄却。

日本軍「慰安婦」、女子勤労挺身隊問題の

解決をめぐる状況

花房俊雄

●はじめに

去る六月二六日から四日間、毎年恒例の原告たちを訪ねる旅をしてきました。一年間の時間は原告たちに確実な老いを刻んでいました。一年に一回の原告訪問の旅は今の原告たちの姿と気持ちを心に刻む貴重な出会いになってきました。

老衰のために二ヶ月間の入院生活を終えたばかりの元「慰安婦」原告の李順徳（イ・スンドク）さんはますます体が小さくなり、表情が青白く、一階に一人では降りられないほど目が見えなくなっていました。「さびしいよ、帰るな、泊まっていけ」とさめざめと泣かれる姿を心に刻み付けました。

元女子勤労挺身隊で、すでに四年前から認知症が進んでいて、私たちを忘れてしまっている村さのさんの姿もまぶたに焼き付けてき

ました。関釜裁判が始まって十八年余、二越第二次訴訟が起きて八年がすぎ、すでに五人の原告が亡くなり、残された原告たちが老いと死を迎えるのを見守る時期になりました。

●日本軍「慰安婦」問題の立法運動の動き

昨年一〇月に会報で立法運動の動きをみなさまにお届けして九ヶ月が過ぎました。昨年十一月には日本軍「慰安婦」問題の立法解決を求める六一万余の国際署名を政府に提出しました（同封した「全国行動二〇一〇活動ニュース」を参照ください）。二月には大阪で拡大事務局会議を開き、戦後補償議連「慰安婦」担当の稲見議員との意見交換で、民主党内の新人議員に地方と国会内から働きかけて与党内に「慰安婦」問題解決の気運を盛り上げ、解決に向けてのプロジェクトチームを作

る方向で動くことになりました。そのような取組みを開始した矢先に三・一一東日本大震災が起こり立法解決に向けた政治状況は一層きびしくなりました。

●混沌としてきた「政局」

昨年七月の参議院選挙で過半数を失った菅政権は内政・外交で追い詰められ、今年の通常国会のはじめ立ち往生しかかったときに三・一一東日本大震災と大津波、福島原発事故が起き、「国難に挙国一致で当たれ」との世論に救われて何とか政権を維持してきました。が、災害対策への取組みが遅滞として進まないうなか、六月に内閣不信任案が提出され、乗り切るため「辞意」を表明する事態になりました。それ以降開き直った菅首相は「脱原発」を模索しながら自然エネルギー買取法案の成立に執念を燃やし、電力会社・財界・自民党・経済産業省挙げての辞任圧力に抗し続けています。脱原発（新自由主義路線との決別をも暗示しながら）をめぐる政権内部さえ分裂する危機的な「政局」が続いています。こうした中で被災地での取組みの遅れも重なり、

被災者や国民からの与野党への政治不信はかつてなく高まってきています。

こうした既成政党への不信は、橋下大阪府知事率いる維新政党が一举に地方選挙で過半数を制し、君が代を歌わない教員への厳罰化や、「新しい歴史教科書をつくる会」系の教科書採択を目指す意見書が次々に地方議会で採択される動きになってきています。「ガンバレニッポン」の掛け声のもとで、市民の不安と現状変革願望が排外主義と国家共同体への帰属意識に吸い上げられていく不気味さを感じます。

今の私たちは、焦眉の課題である脱原発へ政治が舵を切るように働きかけながら、混沌とした政治の行く末を見守り、「慰安婦」問題解決に向けた世論を絶やさぬように動いてまいります。

●女子勤労挺身隊

一方、不二越の女子勤労挺身隊訴訟は昨年三月に金沢高裁で敗訴し、現在最高裁に上告中で来春までには結果が出されると思われませんが。原告を先頭にした不二越企業への働きかけも、和解の扉を開くにいたっていません。昨年十一月から始まっている名古屋の三菱飛行機工場に動員された女子勤労挺身隊原告側と三菱本社との交渉結果が与える影響は大きく、見守っているところです。



会計報告

2010年4月～2011年6月 (単位:円)

収入		支出	
前期繰越	334,072	原告医療費	331,900
会費・カンパ (123件)	547,500	他団体へのカンパ	38,080
		広報費(ニュース印刷・発送代等)	88,279
		事務費(郵送代・コピー代等)	8,462
		合計	466,721
合計	881,572	合計	466,721
		差引残高	¥414,851

担当:緒方 貴穂

<新年度会費納入のお願い>

東日本大震災の被災者の皆様に謹んでお見舞い申し上げますとともに、1日も早く心休まる日がおとずれますよう切にお祈りいたします。

昨年度も皆様からあたたかいご支援をいただき、心より感謝申し上げます。おかげさまで医療支援や立法解決のための取り組みを続けることができました。今年、1991年に韓国の金学順さんが名乗り出られて20年目となります。また、12月にはソウルでの水曜デモも1000回目を迎えることとなります。この間、無念のうちに旅立たれた被害者を想うと胸がしめつけられますが、これからもあきらめることなく取り組みを続けていく所存です。大変心苦しいのですが、新年度会費の納入をお願いいたします。(すべての方に振込用紙を同封しています。既に新年度会費や賛同金をお送りいただいた方には、大変失礼と存じます。何卒ご容赦下さい。)

「心触れ合うひととき」

訪韓報告

塚本勝彦（広島）

田植後の一番草をとり終えた矢先、福岡の花房夫婦から関釜裁判原告ハルモニを激励に三泊四日で韓国に行かないかと連絡を受けた。すぐさま同行を依頼した。キムチ造りの師匠の柳Ｔ（ユ・Ｔ）さんをはじめめ限られた方となるが関釜、富山不二越裁判原告ハルモニに会いたかった。

このたびの韓国行きはもうひとつの目的を持っていった。

濟州島で戦死した私の実父の犠牲地を探してほしいと、映画「アンニョン・さようなら」出演の李熙子（イ・ヒジヤ）さんに約束していた。民族問題研究所で李熙子さんお会いし濟州島に連絡していただき、戦死地は判明した。

久しぶりに釜山の柳Ｔさんに会う。お顔の色艶がいい。足が痛いと言いが元氣だ。いまだ散歩されるといふ。たびたび「キムチ造り交流会」に三次に来ていただいただけに懐かしい。私のキムチの師匠だから。また広島に来るかねと聞くと娘と一緒に旅行するよと返事が返った。健康なときもう一度広島に迎えたい気がする。



筆者と柳Ｔさん（6月26日）

ソウルでお会いした羅Ｈ（チ・Ｈ）さんの印象も深い。いつぞや富山の不二越裁判の公判時、広島空港から富山に案内したことがあった。車中でながれ去る駅ごとにメモをされていたことを思い出した。それ以降の出会いで懐かしい。思わず手を差し伸べた。この華奢な手にどれほどの苦勞がしみ込んでいるのだろうか。腰痛のためか二重のクルセツトを見ると痛ましい。会話の中で見る笑顔は再会の喜びを覚える。

朴ＳＯ（パク・ＳＯ）さんにもお会いできた。あの気丈な朴ＳＯさんが痛んでおられる姿に声が出なかつた。関釜裁判判決時の写真から想像できない。朴ＳＯさんには良く注意

を受けた。足の不自由な原告ハルモニに手を差し延べるたびに、腰痛もちのハルモニに手を差し伸べると注意された。「男が女にむやみに手を出すものではない」ということだった。寄り添ってきても注意された。でもその注意はうれしかった。この姿は私に受け入れがたい。

李順徳（イ・スンドク）さんにもお会いできた。「頭が痛い」「腰が痛い」お会いするたびいつもの言葉だった。いまでも頭が痛いとか。頭をさする。痛いという。髪をとくように触れる。顔が穏やかになる。手足を摩る。気持ちよさそうだ。「泊まつて行けよ」。わずかな時間であるが満足感に浸るスンドクハルモニの笑顔が美しい。他のハルモニにもお会いしたが主な方の感想を記載させていただいた。

戦後補償問題で司法の場で事実認定はするものの国や企業からの反省、補償は実現していない。私たちの力のなさを重く感じる。一方で原告ハルモニたちを訪ねて話し、激励しお互いの健康を喜び合うことが大切なことだと教えていただいた。あれから十数年の歳月を経て、いま、心通じ合うひと時であったと思う。私ができるひとつの行動である気がする。お会いできたハルモニの皆さん、ありがとう！

韓国訪問記

六月二十六日～二十九日

花房恵美子

六月二十六日

広島から新幹線で来る塚本さんと博多駅で待ち合わせて、福岡空港へ。離陸を待つ蒸し暑い機内で心はずで釜山に飛んでいるがなかなか飛行機は飛ばない。そのうち、台風で釜山に着陸できないとのこと、空港の待合室への移動となる。待合室から釜山に電話するが、柳丁（ユ・丁）さんはすでに迎えに出ていて連絡がつかず家族に伝言し、朴SU（パク・SU）さんは心配し疲れておられた。三時間遅れで、釜山空港に着いて、ササンのバスターミナルで二方向に別れる。私は宜寧の朴SU（パク・SU）さんの家に向かい、塚本さんと俊雄は海雲台の柳丁さんの家方向に向かう。

朴SUさんには、心配されるからと、三日前になって電話連絡したのだが、その頃慶尚南道は雨また雨でとても心配されたそうで、毎日柳丁さんに「大丈夫か」と電話して、丁さんに「黙って待ちなさい！」と一喝されたそうだ。

飛行機がいつ飛ぶか分からないと福岡から連絡した時点で、心配して疲れ果てて睡眠薬を

飲んで寝たそうで、バスターミナルから今から行く」と電話すると、またまた心配して、五回も家から道路にでてみていたとのこと。宜寧には午後六時近くに着き、八時前のバスで釜山に戻ったが、その間もSUさんのパニック状態は続いていて、不二越時代の空襲による恐怖の後遺症が一層ひどくなっているようだ。



朴SUさん
(6月26日)

柳丁さんの知人が経営するホテルに着いたのは十時近くになっていて、いつもは八時に寝る丁さんが起きて待っていて、ダブルベッドで一緒に休んだ。

二十七日

朝五時から丁さんと二人で四方山話をしている、結構こみいった話もできることに驚き、「丁さん、日本語が上手になったね！」と言うと、「二年に一度、日本語を使うために、忘れないように老人クラブで練習している」「日本語の分かるおじいさんを相手に練習していると、『韓国人なら韓国語を話せ!』と怒られるときもある」とのこと。

八十五歳の彼女の努力にひきかえ、わが身を恥じた。

ホテルまえで別れて、KTXでソウルへ。

元国鉄マンの塚本さんは、KTXの揺れの少なさに「すごい技術だ!」と驚いておられた。姜済淑さんに付き添ってもらい、金丁（キム・丁）さんと羅H（ナ・H

）さんに漢江をわたったところの千戸（チヨンホ）で待ち合わせ、再会を喜びあつた。

羅Hさんは硬いコルセットをつけておられ、長時間椅子に座ることは無理そうで、金丁さんもパーキンソン病が進行しているようで、歩きづらそうだった。

金丁さんは離婚しておられて、一人息子が

おられるが、彼も離婚していて、彼の一人息子を丁さんが育ててこられた。息子は職業

が定まらず、タクシーの運転手をしていて事故で大怪我を負い、退院したが、通院している。生活の厳しさは相当なはず。

今の悩みは、愛情を注いで育ててきた孫から受ける「疑惑」で、おばあさんの被害を理解

できない彼は、授業中に「日本に行ってきたことのあるおじいさんやおばあさんがいる人」と問われても手を上げないとのこと。お

ばあさんが日本軍の『慰安婦』だったのではないかと疑っているとのこと、悲しそうだ

った。（孫は心の優しい子だそう）

それで、私たちは、お孫さんと一緒に富山に

来てもらい、工場もみてもらって、おばあさん

がどんなところでどのように働かされたの

か、実際に見てもらったらどうだろうか」と提案した(彼は今高校2年生)。Jさんが嬉しそうにされたので、北陸連絡会とも相談していききたい。

羅Hさんも家族からの差別にずっと苦しんでこられたが、四人の子どものうち二人の娘を最近癌で亡くされている。亡くなった娘たちとは心が通っていたそうで、夫も息子も嫁も差別的で、電話がかかってくるので、ひと言を伝えてくれなかったりするそうで、ひとりになれる療養所(老人ホーム)を探しておられる。

ただ一人残った娘には本当のことを知ってほしいので、自分も一緒に娘と富山に行きたいとのことでしたが、彼女の腰の状態は悪くて、とても日本に来れる状況ではないことも事実。夫は、娘たちが癌で亡くなったのは、子宮癌を患ったことのあるHさんのせいだと責めるそうで、それも傷口に塩をすりこまれるっらさだそう。



羅Hさん、金Jさん(6月27日)

「挺身隊」という言葉が韓国では日本軍「慰安婦」と同義語で使われてきたために、勤労挺身隊の方々がこうむっている差別被害がいまだに続いていることは悲しい。

この混同を明らかにするために裁判に踏み切った羅Hさんをはじめハルモニたちの悔しさは想像を絶する。せめて家族の「誤解」だけでも解きたいと願う。

三菱に動員された梁錦徳(ヤン・クンドク)さんの厚生年金脱退金の九十九円問題で、韓国社会でかなり知られてきたと思っていたが・・・北陸連絡会の努力で、韓国の京畿道で不二越勤労挺身隊ハルモニを支援する組織が近く発足するとのこと。

二十八日
午前中はイ・ヒジャさん、民族問題研究所を訪問し、塚本さんの実のお父さんの戦死場所がほぼ特定できた。近く調査、追悼に行きたいとのこと。

その帰り、朴SO(パク・SO)さんのお見舞いにチョンリヤンリの療養所に寄った。息子さんに今から会いに行くと電話連絡すると嬉しそうだった。

SOさんは昨年より痩せられて、顔も小さくなり、動きも鈍くなっておられたが、行って喜んでもらったような気がした。何も話せず、お会いしただけだが、私たちも会えて嬉しかった。



朴SOさん(中央、6月28日)

午後一時過ぎ、予定時間より少し送られてウリチブに到着する。

李順徳(イ・スンドク)さんも痩せておられて驚いた。二ヶ月くらい入院していて、この日も朝から病院に行っていたそう。

冷蔵庫に果物を用意して待っていてくれた。「ごはん食べたか? (食べたと答えると) うそだろ!」「内地に行っていた頃はよかった。

(裁判で日本に来ていた頃のこと)今は頭が痛い!あちこち叩かれて痛い!」「子どものころはよかった。可愛かった。」「オレの部屋にはよくお客さんが来た。『結婚してくれ。満州に行こう』と言われた。嫌だ。家に帰ってお父さんとお母さんのところで結婚する。と、言った。」「よく叩かれて、蹴飛ばされて、怖かった。」「今日は(あなたたちが来て)嬉しんだ。」「バカヤロ!とよく叩かれた。そんなことされなければまだ若い。体が痛い!涙



李順徳さん(6月28日)

が出る。私の体痛い！お父さんもお母さんもないなかった。無理だよ。無理！無理！初めてだし、子どもだし、何も分からない！怖かった。とても怖かった。」とずいぶん泣かれた。肩を抱いたが、あまりに瘦せられていて壊れそうに感じたほどだ。
四時間近く滞在したが、順徳さんは良く話された。話は子どもの頃、慰安所時代のこと、裁判のこと、現在のことと、どんどん飛びながら、薬を飲まなければ眠れない今の頭痛の苦しさを訴えられた。
「私たちが訪問するのは)嬉しい。でも半分つらい。帰るだろ。帰ったらつらくて涙が出る。ご飯食べて、ここで寝ろ。いつ帰る？今度いつ来る？来月？」と泣かれる。階段を下りれなくなっているの、二階ですりのところでお互い泣き顔でお別れした。



金文淑さん(6月29日)

ICレコーダーで順徳さんの声を聞きながら、この報告を書いているが、意外と力強い声なので、懐かしく思う。九十二歳の彼女に、日本語を覚えてもらっているの、話ができることを感謝しながら、順徳さんが愛しい存在となっていることを実感している。
二十九日
KTXで釜山に戻り、釜山挺対協の金文淑(キム・ムンスク)さんに会いに行く。
九十八年以來お会いしていないので、十三年ぶりだ。何らかの「解決」が出来てからお会いするつもりだったが、期待していた政権が政権運営自体が厳しく、すぐに動きそうもないので、思い切って会いに行った。
さすがに往年の迫力はなく、寂しくもあつたが、喜んでもらったようだ。
事務所の隣に展示室を設け、次世代に記憶と記録を残そうとされていて、「関釜裁判ニュース」も翻訳して本になっていた。

一年は私たちにとっては短い、ハルモニたちにとっては長いと感じた。適切な言葉は出てこないが、「義務」とか「責任」という感情とは関係なく、ただ会いたい対象にハルモニたちがなっていることを感じる。

(予定) フィリピン 記録映像—ロラたちの“いま”
「カタロウガン ロラたちに正義を！」
 11月20日(日) 午前10時半より
 福岡市男女共同参画推進センター・アミカス
 視聴覚室 (福岡市南区高宮3丁目3-1)
 参加費: 未定
 主催: NPO法人女性エンパワーメント福岡
 共催: 早よつろう! 「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか

全国行動2010全国会議に参加して

N.K



宋神道さん（於：東京）
5月21日、久野綾子さん提供

五月二十日、二十一日と東京での全国行動会議に参加してきました。感想としてはとてもまどまらないですが、参加している最中は難しさばかり感じた二日間だったのが、終わってしばらくたつてみると、参加者同士で思いを確かめ合う、大事なプロセスだったのかなとも思っています。

全国行動2010は民主党政権という局面を活かして立法解決を実現しようという趣旨で結成されていますが、今回の会議で改めてわかったことは、会の結成の趣旨や行動の方針に対する認識が個人個人で多様だということとです。しかし、考えてみれば政治的な気運が停滞している状況にあつては個人個人のスタンスが多様化するの当たり前のことかな

とも思います。

声を上げれば届く、希望を捨てず叫び続けるということが運動の基本だとしても、それは「慰安婦」問題が噴出して以来ずっと続けてこられたことであり、民主党政権というチャンスを活かす抜本的な取り組みというわけではないかもしれませんが、とはいえそれはどのような状況でも変わらず原動力となっていくもので、地道な熱い思いに触れることは、励まし合いになったと思います。

私自身は立法解決という手法においては知識も経験もなくなかなか貢献できないため、わざわざ東京の会議に参加しているのは単純に興味があるし学びたいからですが、どのような難局であつても希望を捨てない人たちとつながっていたいからという思いもあります。全国規模であることは大きな意味を持ちます。

岡崎議員と稲見議員を迎えての懇談会では、希望の見えない現状を意識させられた感があつたとはいへ、私は岡崎議員の涙に、くやしきの奥に、根本的にある真摯な思いが感じられて、痛みに寄り添う人たちのつながりを実感しました。もちろん、そこに満足したところで謝罪と補償という形に至らなくては仕方がないという意味では、なかなかやりきれないのですが。

宋神道さんをお迎えしての昼食会も、今回

の日程の中でのビッグイベントでした。宋さんは緊張されていた様子でしたが、気分よく三曲も歌を披露して場を盛り上げてくださり、一人一人のメッセージをしっかりと聞いてくださいました。震災で助かってよかつたと言われると、「オレが死ぬときはみんな死ぬよ」と宋さんのキャラクターを感じさせる言葉で応えられ、でも本当にそうだとも思わされたりしました。

昼食会が実現したのは、被災した宋さんを支えられた仙台の女たちの会の方々、東京での支える会の方々の懸命な支援があつたからです。宋さんに笑顔が戻ったことを、心から喜び、感謝したいです。川田文子さんと梁澄子さんが宋さんの両脇に座りましたが、安心できるお二人の間に宋さんが座られているということそのものが、長年の歩みを感じさせる、温かさがありました。宋さんのおしゃべりな帽子は、梁澄子さんがプレゼントされたということでした。

映画が次々にできていくのも、活気づいていくと思います。私個人は研究活動や教育の現場に関わることで頑張りつつ、全国行動としての取り組みも、いろいろ教えていただきながら、関わっていききたいです。金学順さんの名乗り出から二十年、とてつもなく長い年月ですが、今年少しでも明るい展望が見えてくることを期待したいです。

行動雜感

安倍妙子

関釜裁判ニュースを読んでおられる人たちの中にも、この東日本・東北大震災で被災に遭われた方がいらっしやるのではないかと思います。また、被災地ではなくても、報道をじつと見守る中で共感疲労を起こし、被災者の方と同質のPTSDを受けてしまった読者の方たちも居られるのではないかと思う。この四カ月余り、どんなにか大変な思いをして過してこられたらどうかと、震災地の復興の報道を観る度に心が痛み、自分も一日も早く復興の役割を担いたいのに胸が逸る。

その大震災の直後に、震災地と遠く離れた私も、直接の震災との因果関係は全くないが、特老ホームに入所している九十歳の母と、十七年間飼っていた愛猫を立て続けに亡くした。震災と時を同じくして突然家族を失った喪失感、被災地の人々をTVなどで客観的に観ることは幾らかの違いがあり、どこか共感するものがあった。

昨日まで元気を確認して話をして過こした翌日の突然の訃報に、何度自分の耳を疑ったことか。十九時間前の昨日とは変わり果てた母の姿を見て、どうしてもその死が母の天寿とは考えられない自分が、ほんの一時の間、在

った。どうして！ どうして！と、何度も周りを責めたくなくなった自分が居た。

それまで客観的に観ていたTVや新聞の報道が、俄に自分と重なる。

家族を亡くすということがどれだけストレスの大きいことか、そして哀しく、痛く、どんな代償を持ってでも癒せるものではないということに苦く味わう。大災害と同じ時期に家族を失う体験をしたことで、喪失感からいくらかでも心が回復していくメカニズムとその過程を少しずつ自分に体感する。

補足の紹介になるが、私は普段はカウンセリングを生業としている。私の一生涯のテーマとして、「慰安婦問題」に加えて、この「東日本・東北大震災」の心の手当のサポートを担っていきたくいと思っている。震災被害に関する心の問題でお役に立てれば幸いに思う。切にそう思う。

五月二十日と二十一日に、東京での「慰安婦問題解決行動二〇一〇」の全国会議に参加した。

在日の韓国人でたった一人、旧日本軍の「慰安婦」だったことを名乗り出られた宋神道さんは、宮城県の女川町で被災されたが、その会議の時間にお会いして元気を確認した。

戦時中に壮絶な被害を受けながらも強く生き抜き、過去を語り裁判を起こし闘い抜い

てきた宋神道さんが、あの未曾有の大震災でも八十八歳という高齢の中、はだして逃げ出して生き延びた。その数日間の安否確認の間は、私たちも固唾を呑んで無事を待った。

東京での宋神道さんを囲んでのひと時、母への思いと、宋神道さんの姿が重なる。

差し出されたマイクを握り、力強く、支援運動をする側の私たちをむしろ励ますように語られる。亡くなった母とほぼ同い歳だ。会場で力強く語り続けるその姿を見て、一瞬、私は、母が子供を思う想いで言葉を伝え、聴かされているような感覚を覚えた。

戦時中に想像を絶する被害を受け、なお大震災でも力強く逃げ延びた宋神道さん。

今、私たちの目の前にある「慰安婦問題解決」への道のりは、この宋神道さんや多くの被害者の方たちへの思いに寄り添いつつも、震災復興の事業が優先されている現在、今なお政府のその解決の緒が見い出せないままであることをもどかしく思う。

地方において、各国会議員と我々市民運動側との懇談の機会をきっかけにして、「慰安婦」問題についての認識を新たにしようとうと福岡で取り組み始めた、議員事務所へ出かけての面談要請の取り組みが、現在のところの中心課題だ。

政権交代後、我々のこれまでの運動に一番近いところで理解を示してもらえろと思つていた政府ではあつたと思うが、震災の復興支援のあり方や原発問題対応の疑問点など、これほどに国民を不審にさせる政府であつたのかとやりきれない思いがする。

これからの時代は、我々運動側も国や政府に抗議し詰め寄るのではなく、また国もこれまでと同じように無言で留まるのではなく、共に歩み寄りの入口を見つけ出し、共に近寄り、提言して折衝し合い、被害を受けた方々に、深い心からの赦しを乞い、遅くなつたことを深く詫び、最善の補償を示す時代に既に入らなければならないと思ふ。

これまでの時代の価値観は大震災によって全て大きく崩壊した。国はその現実を正しく知るべきである。国はそしてそれを恐れてはいけない。早くその先の作業を進めていかなければならない、もう時間が本当になくなつてしまふ。

私は、このニュースを手にして読んでいる国会議員にその行動力を問い、誠意を問う。

そして国が示すべき道筋を切り開いていくことを、私は日本女性として、アジアの一員として、そして母親として、さらに何よりもこの地球上に住む人類の一員として、日本国中の政治家たちに、今、問いかける。

《ハートフルフェスタ福岡2011》

戦時性暴力とは？ -インドネシアでおきたこと-

日本軍の「慰安婦」と呼ばれた女性たち

日時： 10月15日(土) 16時45分~18時45分

講師： 木村公一さん

参加費： 無料

場所： コロンセンター (博多リバレイン10階)

主催： 戦後責任を問う・関釜裁判を支援する会



★首都圏だより★2011・7・3

天気予報のように、毎日「本日の放射線量」と「予想最大電力」が出る。駅構内の照明は半分消され、会社のエレベーターホールは真っ暗。そんな日常にもすっかり慣れてしまった。

三月十一日、わたしは新宿区の会社で仕事に激しい揺れに見舞われた。首都圏の鉄道各線がすべて止まってしまい、帰宅の足を奪われた大勢の勤め人たちが、東京の歩道を埋め尽くして家路を黙々と歩いた。多くは夜中までかかって何時間も歩き続けた。ただ、それでも帰るべき家がある者は幸せだった。ニュースで見た映像では、家も家族も仕事場も流されてしまった人が沢山いた。街全体が消滅していた。

三月十二日、福島第一原発で水素爆発、の報にわたしは血の気が引いた。これからいったいどうなるのだろうか。と。しかし、わたしはまだ安全地帯に居られた。福島原発の近くの人々は、住み慣れたふるさとを追われ、いつ帰られるともわからない、文字通り「流浪の民」になってしまった。福島県民ではない、首都圏に住むわれわれが、使う電力のために、だ。

そもそも原子力とは、人類が手にするものではなかったのだと思う。コントロールし、使いこなすには人類の手に余る。それを御することができるのだという傲慢さが悲劇を招いた。福島が本当に「うつくしま」に戻る日はいつなのか。やっかいなものを大都市から離れたところに押し付ける構図に、福島は沖繩とダブってわたしには見える。(元編集長・Y)

地元選出国會議員への要請行動

(立法ネットMLの報告より抜粋)

緒方林太郎衆議院議員と面談

十一月十四日、緒方林太郎議員と黒崎の事務所面で面会してきました。参加者は六人でした。

緒方議員のブログを読んでいきましたので、彼が①はつきりものを言う ②人権意識はあはるほう ③国家意識も結構強い、と予想して事務所訪問しました。

前日の打ち合わせの時に確認して、こちらがさきに要請の内容の説明をしてから、話し合いをするつもりでしたが、会って最初に緒方議員はご自分の立場を明確に話されました。

「①自分はこの問題(慰安婦)問題を良く知っている方だと思ふ ②人間として道義的責任を感じている。謝罪をすべきだ ③歴史に残すべき問題で、しっかりと次世代に伝えなければいけない ④しかし、外務省条約課にいた者として二国間条約で解決済みなので特に日韓請求権協定で『完全に解決され』追加的な請求はできないようにしている。ここを崩すことはできない。事実の解明と責任の明確化はすべきで、そのためなら動けるが、お金を出すこと(補償)が目的に入るならば自分は賛成できない。」

約束の一時間があつというまで、半分以上は議員が話されました。「外務省の常識がよくわかり、改めて「壁」が見えました。彼はリップサービスはまったくしない人で、本音で話されたので、話せたことは良かったと思ひました。(花房恵)

緒方議員の面会に同席させていただいてありがとうございました。地元選出議員にも関わらず事務所に行つたのはもちろん、ご本人にお会したのも初めてでした。昨年の北九州市主催の「ふれあいフェスタ」での強制連行の展示を一時間かけて見学されたと聞いていたので、少し好感は持っていました。お会いできてよかつたと思ひます。

これからも議員として様々なことを経験していただいて、特に関心を持っておられる強制連行、部落、「慰安婦」問題などについて心にあふれる学びをされて、これらの問題がただ過去の歴史事項ではなく、目の前で苦しんでおられる方々に手を差し伸べることでできる議員さんになってほしいと思ひました。なられることを期待しています。(野口)

古賀敬章衆議院議員 事務所訪問

十月十九日、参加者四人でした。

池田さんの車で福津市の事務所へ。秘書の

方の対応は、大変丁寧でしたむしろ、丁寧過ぎる。というか、ちよつとつかみどころがない印象がありました。

最初から最後まで、秘書の方は「慰安婦」問題のことは「十分に承知しております」的姿勢で一貫していました。では、ほんとうに理解されているのかと思ひきや、俊雄さんが具体的な内容に入り、関釜裁判のことや国民基金の話に入ると、それらのことは「知らない」という返事でありました。「知らない」と、言われるだけまだマシなのかもしれませんが。こちらから問題を投げかけても、するりと抜けるような感じでした。

反応がよかつた点。俊雄さんが東京に行つて鳩山さんと会つて「慰安婦」問題の立法解決の説明をした時、鳩山さんは関心を示された、という案件。このような行動のことは特に新人議員に会われる時とかに文書にして持つていかれたらいいですよ、とアドバイスまで頂きました。

秘書の方の古賀議員評は、「男女共同参画社会の(福岡県)責任担当者?でもあり、人権の問題にも高い関心を示している。」「他人の痛みを受け取れ」と、議員は日頃からわたしたちに言っている、など、人権には高い関心がある議員であるという。少なくとも、法案反対には回られないだろう、というところから落ち着いた、という感じです。(のだ)

「時が来れば実を結び」

—下関上映会を終えて—

山原順子 (下関市)

「閔釜裁判を支援する会」の花房(こ)夫妻に初めてお会いしたのは、九十三年、下関地裁で始まった「閔釜裁判」傍聴の折だった。いつも優しい笑みで接してくださるお二人のお人柄は今も少しも変わっておられない。国際的にも高く評価された「下関判決」が高裁、最高裁に敗れた後、下関ではなく福岡で閔釜裁判支援を継続されていることに、いつも心より敬服していた。日韓併合百年の昨年、「慰安婦」問題解決のため「全国行動」(二〇一〇)が発足。政府に早期解決を求めて「意見書」を送った三十六地方自治体の中に、下関市の名前はなく、この「全国行動」のため連帯した全国四十四市民団体の中にも下関のグループ名がないのを知った時、一介のキリスト者に過ぎない私は「あなたはどこにいるのか」(聖書 創世記3:9)と問われているような気がした。五年間「閔釜裁判」を傍聴し「女性国際戦犯法廷」にも上京、悲惨な証言をあまり聞いて来た。が、地域にあつては沈黙にうち過ぎていた。

昨年七月、小倉の「西南KCC」(西南韓国

キリスト教会館)で、「慰安婦」問題に関わっておられる福岡市と北九州市のグループ交流会があり、隣接する在日大韓キリスト教会で長年持たれている女性神学をベースにする読書会メンバーである私も、思い切つて陪席させて頂いた。席上、皆さんの熱い取り組みを伺いながら、「下関判決」(立法不作為)で国に賠償命令。今も「立法」救済は運動の最大目標が出ている地元下関も、当然目覚めの「時は満ちている」と感じた。やつと半年後、「慰安婦」映画、『オレの心は負けてない』を観ませんか」とささやかな声上げをした際、「閔釜裁判を支援する会」はすぐ賛同団体になつてくださった。上記交流会の主催者「西南KCC」と「日本軍『慰安婦』問題解決のために行動する会・北九州」も進んで加わつてくださった。こうして下関上映会は実に閔門海峡を挟む四つの賛同団体(筆頭は「二〇フイート映画を上映する下関市民の会」)によつて協力の基礎は固められた。どんなに心強かつたかれない。(在日の慰安婦裁判を支える会)調べで山口県初公開である。

思いがけず「下関市教育委員会」と、マスコミ四社(朝日、毎日、読売、山口新聞)の「後援」も取れた。上映賛同人百三十二名、実行委員十七名(市民運動活動家、医師、市会議員、神父、牧師、編集者、教師他)。第一回実行委員会は三・一一大震災が起きた日で、初日から「主

人公の宋神道さんは宮城県在住、大丈夫?」の声飛び交った。十日後に各委員からほぼ同時に「宋さん無事!」の報が入った時は本当に安堵した。この映画の究極の上映目的は「慰安婦」にされた女性たちと同年齢の今の女生徒や女子学生を守るためであり、次世代を創る若者にも見てもらいたいとの観点から、市内十三の学校(大学、高校、中学)を訪問した。「教育委員会後援」が有効だったのか、いずれの学長、校長方も映画の趣旨説明をよく理解してくださり深謝した。ある高校校長は「慰安婦」問題はずっと教えて来たと実践資料までお見せくださった。心底感動した。

五月二十一日の上映日当日は、ロビーに西南KCCからお借りした「慰安婦」パネル八枚(うち宋さん分三枚)を掲示。上映前は在日の地元男性歌手の方が「慰安婦」の心情をつづる「故郷を思う」を歌つてくださり、間奏中はその歌詞を在日女性がハングルで朗読された。いずれも大変好評だった。入場者二五七名。受付には宋さん(大震災で家屋全流出)と宋さんが在住された女川町他のために「募金箱」が置かれ、四万三千円が捧げられた。庄巻は無記名アンケート(七十八枚回収)に表出された市民の声、声である。「感動!」「素晴らしい!」など、宋さんの人柄や実力、「支える会」への賛辞が溢れ、「国は責任を取れ」

「語り、伝え続けるべき」「教科書へ記述を」「これからも支援したい」等、熱い声が集まっている。中には十代の女性が「映画終了後、質問の時間も欲しかった。慰安婦問題はまだ解決していない。戦争はまだ終わっていない。自分たちもこの問題に取り組みたい」等、ぎっしり書き込まれたものもあり、未来を創る世代からの関心が非常に嬉しかった。図らずも上映会場は「下関市生涯学習プラザ」。下関市民の「慰安婦」問題への関心の高さ、暖かさが自然に溢れ出た良い映画会だったと心より感謝している。

驚いたことに、わずか十日後の六月一日、上映会で感動された市内の看護学生さんが自分の学校「下関看護学校」で、早速同じ上映会を実現され生徒五十一名が参加、中には泣きながら観ていた男子学生もあり大好評だったとの知らせを受けた。



ところがその十日後さらに驚くべきニュースが入った。上映会の三日後に、戦争賛美など異なる歴史観を持つ「新しい歴史教科書をつくる会」が、「下関市議会」に來年度使用される教科書に関する「請願書」を提出、「請願書」の検討委員会である「文教厚生委員会」でも既に可決され、後は六月二十三日の市議会最終日（採決日）にかけられるのみとのことであった。上映会には右派議員も来場して

いたことや、他の右派議員が「請願書」作成に助言していたことも確認されているとのこと。五つの市民団体は市議会での「請願」不採択のため「要請書」を作成、六月二十日有志約十五名で市長、教育長、市議会議長、同副議長を訪問、申し入れを行った。採決当日は上映実行委員の一人だった女性市議が「反対討論」に立たれるとのこと、私も初の市議会傍聴にでかけた。他の男性議員と共に各数分間の見事な「反対討論」だった。しかし「記名投票」の結果、何と二十三対九で可決されてしまった。初傍聴の眼前で繰り広げられたこの展開に私はショックを受けた。教科書選定の最終決定権は「教育委員会」にある。これは戦前の皇民化教育が上意下達式であったことを改め、公正、中立、を旨とする教育界へ、政治介入があつてはならないと設けられた「教育委員会制度」によつていふ。市議会「請願」可決は実に教育委員会に政治圧力をかけることに等しいのではないか。下関市の教育委員は五名。目下は、万一にも「つくる会」の教科書（青鵬社）「自由社」が採用されないよう、各市民団体から「教育委員会」へ「要請書」を準備中である。

市民社会の正しい成長のため、教育の質の向上を目指すことは世界中の願いである。「時が来れば実を結び、葉もおれることがない」（聖書 詩編1:3）日が来ることを信じ、

雨や嵐をくぐりぬけて実をみのらせたい。宋神道さんの訴えは最高裁で棄却されたが、ことばを絶する「慰安婦」被害については高裁もしつかり事実認定をしている。今年四月、大江健三郎さんは「沖繩ノート」訴訟で、「沖縄集団自決」は軍が関与していたとの最高裁勝訴をされた。いずれも長い年月が「抵抗」のためにささげられている。正当な抵抗の彼方にこそ真の平和は微笑んでいることを覚えたい。

(二〇一、七、二)

金学順（キム・ハクスン）さん名乗り出20周年

世界同時水曜デモ 連帯 福岡行動

場所 西新プラリバ前
日時 8月10日（水） 17時から18時
行動 横断幕、パネル展示、チラシ配布など
主催 早よつくろう！「慰安婦」問題解決

ネット・おこふ

「オレの心は負けてない」上映会への参加を呼びかけます

映画「オレの心は負けてない」の主人公・宋神道（ソン・シンド）さんは日本に住む元日本軍「慰安婦」被害者であり、93年から約10年間、日本政府を訴えて裁判を闘われました。この映画は彼女のキャラクター全面開花の闘いの記録であり、支援者と彼女、そして両者の関係性の「成熟」の記録です。2007年に完成し、その年に福岡で上映会を行い、泣き・笑い・感動し、また上映会をしたいと願った作品です。

この間被害者の訃報が相次ぎ、韓国で名乗り出られた234人の「慰安婦」被害者のうち生存者は70名となりました（7月4日現在）。民主党政権下での早期の立法解決を求めてきましたが、厳しい状況が続いています。

しかし、戦争を遂行するために女性の性を利用して「慰安所」制度をつくり、日本人のみならず植民地や占領地の多数の女性を強制的動員した旧日本軍の犯罪行為は、日本政府の責任において償わねばならないことです。

今も被害者たちは、その傷に苦しみながら、二度と自分たちのような被害者が出ないようにと、日本をはじめ世界各国国民に訴えておられます。

この度、多くの方々に宋さんを通して「慰安婦」被害の実態や、彼女の生命力と尊厳の回復を感じてほしい、今なお解決していない「慰安婦」問題を考える機会にしてほしいと思い、この上映会を企画いたしました。

宋さんは戦後、宮城県の女川町で暮らしてこられ、今度の東日本大震災で被災し、地域の方々に助けられ、仙台の支援者によって救出され、東京の支援者によって東京での生活をスタートさせています。90歳を目前にしての再出発です。大震災という惨禍を宋さんがどのように生き延び、感じ、考えているのか、ずっと彼女を支え、仙台に救出に行った木野村さんからお話を伺います。皆様の参加をお待ちしています！

映画とお話の夕べ

「オレの心は負けてない」— 日本軍「慰安婦」問題を考える

日・時 8月2日（火） 開場 18時 開演 18時半 終了 21時

場所 日本基督教団警固教会 福岡市中央区警固2丁目11-20

（地下鉄「赤坂駅」より徒歩9分）TEL 741-9002

アクセス-地図 <http://kegoc.jimdo.com/>

内容 ①映画 95分

②お話—在日の慰安婦裁判を支える会・木野村照美さんより 30分

震災を生き延びた宋神道さんに寄り添って

参加費 1000円、学生500円

共催 早よつくろう！「慰安婦」問題解決法・ネットふくおか

「慰安婦」問題と取り組む九州キリスト者の会

戦後責任を問う・関釜裁判を支援する会

活動日誌 (2010年10月～2011年6月)

- 10月 10日 ハートフルフェスタ 挺対協の「慰安婦」関係パネル展示
18日 韓国強制併合100年—残された韓国人遺族の苦しみに耳を傾ける集い
19日 古賀敬章衆議院議員事務所へ要請・秘書と面談(野田、池田、花房俊、花房
恵)
- 11月 1日 立法ネット会議
8日 古賀一成衆議院議員事務所へ要請(川、左近、花房俊)
11月 13日 議員要請の打ち合わせ(左近、川野、花房俊、花房恵、野田)
14日 緒方林太郎議員に面会(野口、左近、川野、緒方、花房俊、花房恵)
15日 九州出身議員へ11・25集会への参加要請文郵送作業
18日 「慰安婦」問題と取り組む九州キリスト者の会の学習会(講師:花房俊雄)
25日 署名提出行動(於:東京)(具島、安倍、川、花房俊、花房恵)
26日 国会議員廻り(於:東京)
29日 立法ネット会議
- 12月 20日 立法ネット会議と忘年会
- 2011年
- 1月 16日 真相究明ネット事務局会議(於:神戸)
17日 藤田一枝衆議院議員に面会
- 2月5・6日 全国行動2010全国会議・大阪合宿(安倍、花房俊、花房恵)
2月 14日 立法ネット会議
4月 18日 立法ネット会議
5月 9日 立法ネット会議
5月20・21日 全国行動2010全国会議・東京(安倍、川、花房俊)
6月 6日 立法ネット会議
26日～29日 韓国訪問(花房俊、花房恵、塚本)
7月 4日 立法ネット会議



★関釜裁判ニュース59号★

2011年7月10日発行

編集作業人 花房恵美子

発行

戦後責任を問う 関釜裁判を支援する会

代表 松岡澄子 入江靖弘

E-mail hanafusa@df6.so-net.ne.jp

年会費 3,000円

郵便振替01740-047678

口座名 関釜裁判を支援する会

WEB版関釜裁判を支援する会

ホームページアドレス

<http://www.kanpusaiban.net/>

編集後記

- ニュースの発行が遅くなり、ご心配をおかけして申し訳ありません。
- 朴5Jさんは福島を福岡と聞き違えて大騒ぎしたそうです。
- 現実感が曖昧で亀裂が入っているような感覚がまだ続いています。混沌を耐える勇気が要りそうです。(恵)

不二越訴訟のお問い合わせは
第二次不二越訴訟支援 北陸連絡会

ホームページ

<http://www.fitweb.or.jp/~halmoni>